



西栗倉村20年の歩みと「行き当たりばったり」の仕組み

気候変動ユニット研究員 小宮 陽菜

森の村の基本情報と、20年前の危機



森に囲まれた小さな村



人口

約1,300人

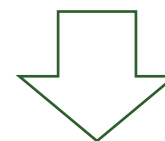
面積の森林率

93%

鳥取・兵庫に隣接

岡山県北東部

今でこそローカルベンチャーや再生可能エネルギーの先進地として知られるが、20年前は注目されるような村ではなかった。



2000年代初頭：自立を選んだ村の危機

- 平成の大合併の議論の中、周辺自治体との合併ではなく「自立の道」を選択
- 観光事業は赤字、財政的にも厳しい状況

→ このままで村として持続できるのか

2

西粟倉村20年の歩み

「百年の森林構想」への転換



危機感



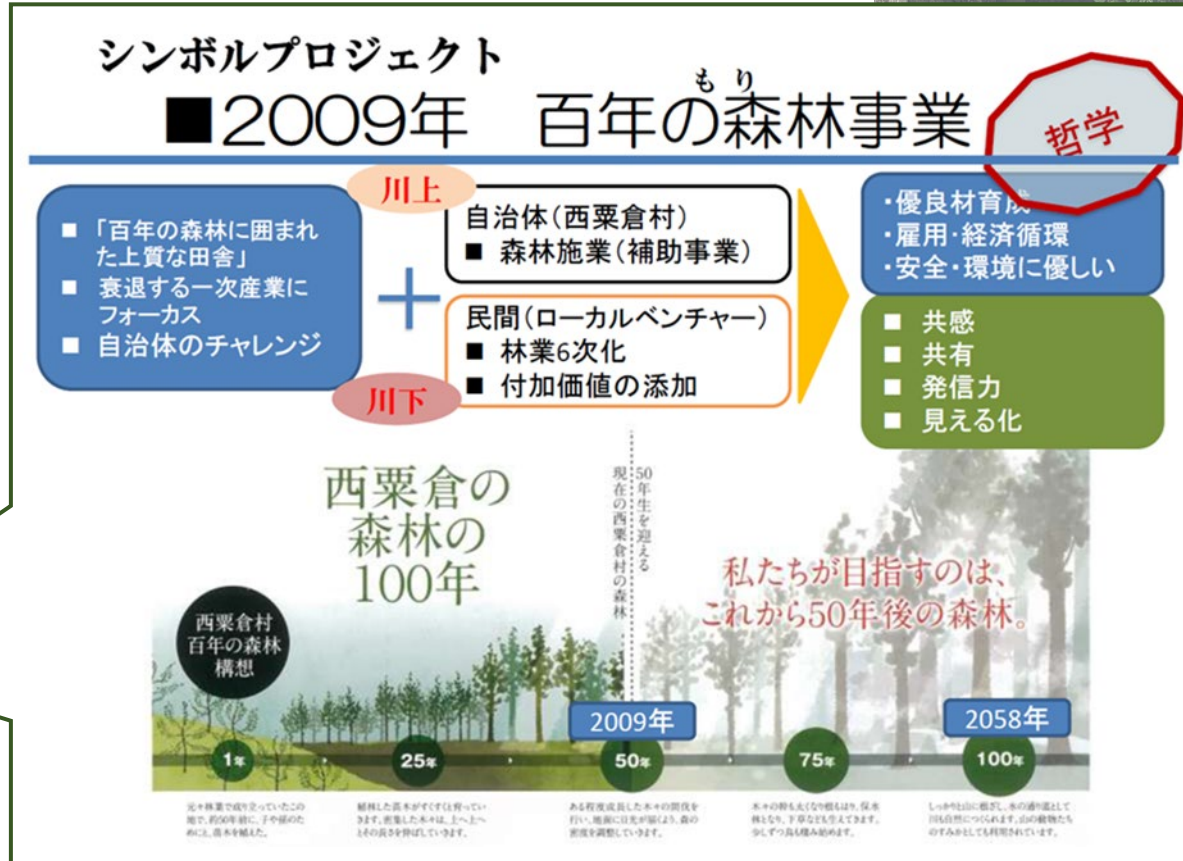
地域資源の棚卸し



森林という発見



2004年
「百年の森林構想」



ご迷惑をおかけします

百年の森林を育てるため
山の手入れをしています

間伐作業中

※12月3日まで
株式会社 西林
電話 0866-75-3898
株式会社 西林

構想ではなく「地域経営の方向性」

百年の森林構想は森林を活かして雇用を生み、産業を育て、次の世代に引き継げる地域をつくるという、地域経営そのものの方向性だった。

森から広がる事業の連鎖



森林整備や木材利用が進む中で、森林という明確な方向性に共感した人たちが移住し、新しい事業を立ち上げ始めた。

ローカルベンチャーとは、「自分の視点を持ち、見落とされていた地域ある宝物を上手に発見して仕

事をつくる。」起業のことで、これまでに**62社**が起業しています。
これからは、企業との連携による地域課題解決型事業創出が有効な手法となる。



ローカルベンチャー

目指す方向性に共感した人材が移住し、西粟倉村の木材を活用した新しい事業を立ち上げる。地域内に新しいプレイヤーが次々と集まり始めた。



再生可能エネルギーへ展開

森林整備で生まれる未利用材の活用したバイオマス発電、小水力発電。森林から始まった取組がエネルギー分野へ。

4

西栗倉村20年の歩み

5つの期で見る、蓄積からの発展



■これまで15年間の創発的戦略による取組方法論



第1期 2004-2010
自立宣言と林業再生



第2期 2011-2018
環境モデル都市・ローカルベンチャー育成



第3期 2019-2021
SDGs・脱炭素の統合



第4期 2022-2024
脱炭素先行・デジタル田園都市



第5期 2025-2030
生物多様性への展開・次の20年へ

「行き当たりばったり」を支える 3つの観点

1

方向性を定める

2

主体と仕組みを育てる

3

学習しながら進化する

1

観点 ①

方向性を定める

1

2

3



ポイント1

事業を担い続ける覚悟を持ったプレイヤーが村内に生まれ、外部人材と対話・伴走しながら構想を育てた

ポイント2

方向性が実行を前提に対話の中で作り直され続けた

上山副村長・CGOへの問い

問1

観光赤字への対応から始まった取組。「こういう村にしたい」という方向性は、いつ・どう形づくられたのか。

問2

最初に軸が定まったことは、その後20年の事業づくりにどう効いてきたか。

2

観点 ②

主体と仕組みを育てる

1

2

3



62 社が起業 228 人の新規雇用

ポイント

行政が前に出てプレイヤーになるのではなく、民間が村内での実装を担い、行政側はファイナンスや制度の翻訳、各プレイヤーとの調整を通じて下支えする体制

上山副村長・CGOへの問い

問1

事業を担うプレイヤーが集まる状態を、役場はどうつくってきたのか。

問2

行政はどこまで担い、どこから民間に任せるか。ファイナンス・制度設計の工夫は。

問3

うまくいかなかった経験から得た学びは。

3

観点 ③

学習しながら進化する



ポイント1

民間の「やりたい」ことを国の政策トレンドに掛け合わせる目利き

ポイント2

過去の実績の上に積み上げる創発的な計画手法

上山副村長・CGOへの問い

問1

新しいテーマの種をどう見つけ、地域の動きと国の政策をどう掛け合わせるか。

問2

「5年先を構想する」— 日頃どんな情報・対話から次を探っているのか。

問3

なぜ「自然資本・生物多様性」なのか。実績の上にどう積み上げるのか。

「行き当たりばったり」を支える 3つの観点

1

方向性を定める

2

主体と仕組みを育てる

3

学習しながら進化する